いまどきの歴史

新聞をななめ読み、
週刊誌を読み飛ばし、
倍速モードでニュースを見れば、
よくわかる、すぐわかる、最近の歴史。

【話題】

恐竜公園実現の可能性が見えた 警備はやっぱり科学特捜隊？

『ジュラシックパーク』といえば、昨年の恐竜ブームを巻き起こすきっかけとなった、スティーブン・スピルバーグ監督の映画。この映画のコンピューターグラフィックを駆使したリアルな恐竜の動きとそのストーリーは、見た者に近い将来、恐竜の化石からクローン恐竜を蘇らせることは可能かもしれないと感じさせた。しかし、これはあくまでも、この映画がつくられた昨年までは仮説上の話。現実には、たまたま琥珀の中にいた原始時代の虫の遺伝子の採取しかできていなかったのだ。だが、今年になってこのSFX映画が現実となる可能性がみえてきた。アメリカの古生物学グループが、大型肉食恐竜ティラノサウルス・レックスから遺伝子の採取に成功したのである。分析の結果、恐竜のDNAは鳥類に類似しているらしく、研究の中心人物、J・ホーナー博士は「我々は昔から感謝祭の日に恐竜を食べていたことになる」と洒落たコメントを残した。実はこの人こそ、あの映画のスピルバーグのアドバイザー。数年後には『ジュラシックパーク』がどこかにオープンする?!

さてこれはカモかアヒルか？

【裁判】

本人はどう思ってるんだろうね バリケンはカモかアヒルか

この鳥はカモかアヒルか？　こんな論争は、どこかの鳥類学者がしているものかと思ったら、神戸税関と兵庫の県の食肉輸入会社の法廷論争でのこと。事の発端は、この輸入会社がフランス料理店でカモ料理に使われる「バリケン」という鳥の冷凍胸肉を輸入したことに始まる。この際、神戸税関は「アヒルは家禽として10％の関税がかかる」と指示し、この会社も輸入の際には関税を治めていた。しかし、この会社はどこかで「カモは無税」ということを聞きつけ、それまで納めた関税の返却を求めて、神戸地裁に提訴したのである。判決は「国際的にバリケンはアヒルとして取引されている」ため、この会社は敗訴した。だが、笑わせてくれるのが動物学者の「バリケンとアヒルは生物学的には別の種類。それが商売の品となると同じ物になるんですかねぇ…」というコメント。立場によって基準が変わるのは法律でままあることだが、敗訴の決め手となった本当の理由は、この会社が税関書類にいつも「冷凍アヒル肉」と記入していたことだそうで、なんともお粗末な裁判の一幕だった。

【現象】

発見から30年で早期なんだとヨ 地盤沈下原因調査のとぼけた顛末

現代の都市開発において、地上スペースの飽和状態の打破を高層化に求めるだけでなく、地下の有効利用も考えるのは当たり前。もちろん、京都でも高層化の規制が緩和され、今後の都市開発は烏丸御池などの地下利用が課題となっている。だが現在四条通り界隈では、この地下利用を進めていくのに大変な問題が起こっているのをご存知だろうか。地下を掘ると遺跡が出てきて工事が進まないことは、今や歴史ある京都の常識。しかし四条通りの問題はそれだけではない。年に数回、原因不明の陥没が起こっているのだ。1963年に阪急電鉄の地下軌道建設以降から、年4～5回は謎の陥没が認められているが、明確な原因がつかめていないのである。市道路部は、最近になってやっと重い腰を上げ、超音波探査などで地層調査を開始したが「いずれも小規模な陥没で、パトロールによる早期発見で対処できる」と30年前から発見していたのに、こんなトボけたコメントをする始末。これでは「京都は都市開発より、伝統の継承がお似合い」と巷で噂されても反論のしようがない。

いまどきのこの

んじゃ、帰化した外国人でチーム組んだ方が早いじゃねーか。

【スポーツ】

ゲームメーカーやーい 新生日本代表のカギは伊達公子？

アジア大会のサッカー日本代表の試合を見て、何か物足りない苛立ちを感じた人は多いはず。見るに耐えないというほどでもないが、昨年の代表よりも覇気が感じられず、ゲームを見ていても面白くない。その原因を一言でいうと、演出家の不在。つまり、昨年のラモス瑠偉のようなゲームメーカーがいないのある。的確な状況判断によってゲームを進行させ、ここぞという時に相手の裏をかいたスルーパスを出す。こういったことができるのは、天性の資質。練習で育つ類いのものではない。だから、Jリーグを見てもブラジルから日本へ帰化したラモスがいるヴェルディ以外、どのチームもゲームメーカーは外国人で、日本人ではないのだ。しかし、日本が1998年のフランスワールドカップに出場するためには、このゲームメーカーの登場が必要不可欠。だが今のところラモスに代わる日本人のゲームメーカーは登場していないのだ。こうなりゃいっそ、ビスマルクを伊達公子と結婚させて日本に帰化させ、ラモスのように日の丸をつけてもらうほうが、賢明なのかもしれないねぇ。

【予言】

ジュール・ヴェルヌの大予言はノストラダムスより明確で正確

予言者といえば、世界的に有名なのがノストラダムス。しかし、厳密にいうと彼の予言は詩的表現のため、解読者によってかなりの違いがあり、事後強引に予言として照らし合わせて解釈した部分が多い。だから、実際には彼の予言が当たったかどうかわからないのだ。そんなノストラダムスよりも、未来を明確に予言した人物がいる。その名はジュール・ヴェルヌ。『80日間世界一周』や『海底2万マイル』の著書で有名なフランスの作家だ。今年になってこのヴェルヌの曾孫が金庫で眠っていた、1863年に100年後のパリを想像して書いた小説『20世紀のパリ』を発見したが、その作品中、ファックスや自動車、地下鉄、あげくの果てには電気椅子までが登場していたのである。もちろん、ヴェルヌがこれを書いた時点でそんなモノがあるはずはない。当時の出版社はあまりにも夢物語に過ぎると相手にせず、お蔵入りになっていたらしい。これ以外にもヴェルヌの小説に出て来た想像の産物は、現代になって実際に登場しているモノが多く、彼こそ、史上最高の予言者なのである。

【ミスコン】

必要な条件は知性と美と才能だけ 障害をもつミス・アメリカへの快哉

アメリカ人といえば、善きにつけ悪きにつけその合理性で知られるが、細かいことに拘らず、その本質だけを認める気質は日本人もまだまだ見習わなければいけない。そう思えたのが、今年のミス・アメリカに難聴のヘザー・ホワイトストーンに決定した時。ミス・アメリカの条件は、知性と美と才能。このシンプルな条件が3つが揃えば、多少のハンディなど関係ないのである。彼女は会計学を学ぶ学生で、見た目にも美しく、才能審査では耳が聞こえないというハンディをものともせずに見事なダンスを披露してミスに輝いたのである。では、これがミス日本であったら、どうだったろうか。たぶん一等賞はとれなかったはず。なぜなら日本では完全な健康体を美とするからだ。つまり、日本ではまだハンディを持つ者に対して細かい拘りがあり、差別していることが多いのだ。これは日本民俗の悪い気質。こんな差別があっては日本の国際化が進むはずもなく、まして本当の国際貢献などできるはずがない。『ハンディよりもその本質を見る』この合理性が今の日本には必要だろう。

ウィーン菓子
モーツアルト
■三条店 京都三条河原町（公楽会館）☎(075)211−7927
■京都店 新京極通四条（京極東宝ビル）☎(075)223−1178
■下鴨店 左京区下鴨松の木町 ☎(075)712−6567
★落着いたティ・サロンで楽しいひとときをお過し下さい。